クロスロード新聞

臨時増刊(2)

2008年12月20日

神戸クロスロード研究会大特集！臨時増刊号(その2)です

発行元：108-8345　港区三田2-15-45
慶應義塾大学商学部　吉川肇子研究室内
クロスロードサポーター事務局

実は臨時増刊第2号

クロスロード新聞臨時増刊、実は2号目だと知っているあなたは相当クロスロード通です(要援護者版新聞が臨時増刊1号です)。今号は、神戸クロスロード研究会の大特集です。メンバーの皆さんのクロスロード実践に感謝！

伊賀クロスロードの様子(全体)

Topics
ー神戸クロスロード研究会平成20年度の活動ー

今年(平成20年)のこれまでの神戸クロスロード研究会の活動を簡単に振り返ってみます。

１　２つのクロスロード週間

クロスロードをするときは、なぜか実施時期が重なることがあります。

【3月】

3月16日(日)　神戸市東灘消防署の防災福祉コミュニティのリーダー研修で、柿本がクロスロードを紹介。

3月17日(月)　神戸市建設局の下水道関係の研修会で、柿本がクロスロードを紹介。

3月21日(金)　やわらの会の「ケースワーカー・すきるあっぷ研修」でクロスロードと西クロスロードを行なう。

【8月】

8月24日(日)　神戸市北区の星和台・鳴子防災福祉コミュニティで吉本さん、浜さんが、大原・桂木防災福祉コミュニティで西さんが、クロスロードを実施。

8月26日(火)　浜さんが、たかとり児童館で、須磨区社会福祉協議会の小田桐さんと共にクロスロードによる指導員研修を実施。

8月27日(水)　浜さん、野々村さんが、三重県の保健師研修のため、津市に出張。野々村さんは、11月には山口県にも出張されています。

8月29日(金)　伊賀市社会福祉協議会の依頼により、伊賀市でクロスロードを実施。

２　西さんの大阪府ツアー

研究会メンバーの西さんは、日本ファシテーション協会の会員でもあり、その縁もあって、あっちこっちから依頼があります。特に大阪府下では、交野市、門真市から依頼がありました。

6月15日(火)　交野市でクロスロード

9月16日(火)　交野市でクロスロード

西さんは、3月8日(土)日本ファシリテーション協会の関西例会で、西クロスロードも実施しています。

(次ページに続く。。。)

目次

実は増刊2号	1
平成20年の活動	1-2
研究会の3年間	3
ケースワーカーのクロスロード	4
コンプライアンス研修	5
パナソニックでクロスロード	6
子育てクロスロード	7-8
児童館でも！	8
地域に活かすクロスロード	9-10
金ざぶ論争	11-12
私のクロスロード論	13-14

責任編集

- チームクロスロード
- クロスロード・サポーター
- SPECIAL THANKS:
  神戸クロスロード研究会
  高知県地震・防災課
  小溝智子（漫画企画）

CROSSROAD

Topics（つづき）

３　浜さんの子育てクロスロード

浜さんは、昨年から引き続いて、玉井さんや小田桐さんとも連携して子育てクロスロード活動を続けています。(玉井さん、小田桐さんからの寄稿は、この特集号に掲載）

〇子育てジレンマクロスロード(北須磨支所地域連絡会　浜、玉井)

3月19日（水）神の谷、3月26日(水）白川台

〇須磨区児童館指導員スキルアップ研修でのクロスロード（須磨区社協主催　浜さん、小田桐さん）

2月8日（金）第1回　設問作り

8月26日(火）第2回　実践に向けて(記載ずみ）

〇7月12日(土）NPO法人「保育ルーム　ぴっぴ」主催子どもの発達支援者対象のクロスロード(浜さん）

〇11月12日（水）トライやるウイークの中学生を交えての子育てクロスロード(須磨区若草児童館主催　浜さん、小田桐さん）

４　コンプライアンス研修も

磯兼さんの肝いりで、神戸市のコンプライアンス研修にもクロスロードが取り入れられました。事例研修の一環で、YES/NOではなくA/Bのカードで自分の判断を提示する方法がとられました。今年の夏に全職場で行なわれました。これについても、この特集号に寄稿いただいています。

５　伊賀クロスロードツアー

８月のクロスロード週間の掉尾を飾ったのは伊賀ツアーでした。伊賀市社会福祉協議会の乾さんから、まちづくり研究所の東末さんを通して依頼があり、実現しました。研究会からは、総勢7名が応援で参加しました。

朝8時過ぎに大阪梅田をバスで出発、10時には到着して、午前中は、社協の方にクロスロードを説明して、いよいよ、午後1時30分から、本番開始。参加者は、伊賀市民の方だけでなく、遠くは、志摩や愛知県からも参加していただきました。西さんのファシリテートにより、楽しく進められました。

伊賀市社会福祉協議会では、このクロスロードによる地域研修を全地域で行うそうです。

６　総会やりました

10月14日（火）夜、神戸クロスロード研究会第３回総会を神戸市役所の協働と参画のプラットフォームの場を借りて開催しました。１２月２０日の「つどい」に向けて議論が盛り上がりました。

７　小溝さんとコラボ

高知県の小溝さんが、人と防災未来センターで研修を受講するため、神戸に来られました。その際、研究会のメンバーと、12月20日の「クロスロードのつどい」における発表について打ち合わせしました。

小溝さんからは、小溝さんが手がけた防災グッズの数々を紹介いただき、打ち合わせも大いに盛り上がりました。

８　クロスロードの印刷物続々

当研究会のメンバーである保健師の野々村さんが「月間　地域保健」や「保健師ジャーナル」に寄稿されたほか、神戸市職員人材開発センターが行っている「コーディネータ養成研修」のクロスロードが「月刊　自治フォーラム」で紹介されました。また、八尾市水道ビジョンにおいても「お客様との協働」の項目の中で紹介されました。

写真上：伊賀クロスロード(8月29日)
写真左：浜さん・小田桐さんの子育てクロスロード(8月26日)

神戸クロスロード研究会の３年間

神戸クロスロード研究会は、平成17年9月7日設立、今年で３年が過ぎました。メンバーは２０人を超え、活躍する分野も、防災だけでなく、防犯、まちづくり、保健師、子育て、ケースワーカーなど様々な展開を見せています。その研究会の３年間を、いくつかの角度から振り返りたいと思います。

◇庁内ＮＰＯ

神戸クロスロード研究会には、２つのルーツがあります。

１つは、もちろん「クロスロード」そのもの。神戸市職員の震災対応の研究から生まれたクロスロードに接した神戸市職員有志が集まって、この研究会を結成したことは、クロスロード新聞第２号でも紹介しました。

ところで、神戸市には、神戸都市問題研究所が職員を集めて自主研究を行なう制度があり、その一つに「政策研究プロジェクトチーム」というのがあります。平成14年度の研究テーマ「市民満足度を高める新たなワークスタイル」について職員12名が調査・研究を行いました。その中の提言の１つが「庁内NPO」です。これは、本来の職務とは別に市政に関連したテーマのもとに、外部人材との交流も行い、実践活動も行なう職員を中心としたグループ活動を意味しています。このプロジェクトチームのメンバーの中の数人と、平成17年8月の泉南市町の研修に出張したメンバーが、この研究会のもう１つのルーツです。

◆口コミ

神戸クロスロード研究会は、クロスロードを広めるにあたって、特別な広報活動は行なっていません。基本は「口コミ」です。

「口コミ」は、費用の問題だけでなく、いくつかの利点があります。１つは、口コミの中で、もしクロスロードが何の有用性のないものであれば、消えてしまうはずであること(市場による淘汰)。２つ目は、興味のある方、意欲のある方に伝わると、次の口コミがつながり、広がる可能性が高まること(ネットワーク)。３つ目には、意欲ある方により口コミが展開する過程で、何らかの改善がなされるであろうこと（オープンソリューション)。

とはいえ、「ハブ」の役割がスモールワールドにおいて重要なように、人的ネットワークを持ち、あるいは、意欲を持ってネットワークを作っていく方々の役割は、とても重要です。浜さんや吉本さんの地域や市役所内のネットワークのほか、大島さんの「自治体職員有志の会」、西さんの「日本ファシリテーション協会」、竹内さんや野々村さんの保健師など、メンバーの市域を越えたつながりが研究会の活動を広域化しています。

◇地域

さて、設立直後の11月、研究会は、神戸市の時間外研修「ステップセミナー」で神戸市職員向けにクロスロードを行いました。しかし、研究会のメンバーは、クロスロードの可能性の「探求」に関心があります。次の目標は「地域」での展開。その嚆矢となったのが、浜さんがファシリテータとなった神戸市西区竹の台におけるクロスロード(平成18年1月14日)です。続いて、吉本さんの星和台・鳴子防災福祉コミュニティー(平成18年8月27日)と、メンバーの地元で実施されます。その後、神戸市垂水区つつじが丘(平成18年11月18日)や北区の大原・桂木防災福祉コミュニティ(平成20年8月24日)でも行なわれました。

地域での展開については、被災が特に大きかった地域で、防災をテーマとしたクロスロードの実施が可能かという議論が、設立当初からあります(クロスロード新聞第２号参照)。それは、被災したという過去と災害の経験を伝えるという現在あるいは未来との「たゆまざる対話」かもしれません。

◆パイオニア

神戸クロスロード研究会は、メンバーの、「興味の向くまま」様々な分野や手法にチャレンジしています。そのいくつかを簡単に振り返ってみましょう。

①大規模クロスロード

クロスロードは１テーブル5人が最少単位ですが、大阪マッセ(平成19年1月19日)、亀岡市(平成19年9月24日)では、100人を超える規模で行ないました。もっとも、規模が大きくなりすぎると、ファシリテータと個々の参加者とのコミュニケーションが難しくなるなど、問題点もあります。

②新技術

グループ対抗の方法やそのためのYES/NOの表が、メンバーの提案により開発されました。また、設問作成が研修として有効であるという意見は以前からありましたが、研修時間内に設問作成を行い、作った設問を参加者全員でクロスロード研修として行なう「西クロスロード」も開発されました。西クロスロードについては、クロスロード新聞第12号をご覧ください。

③新分野

今回のクロスロード新聞でもご紹介しますが、研究会メンバーが、防災だけでなく、それぞれの分野でクロスロードを行なっています。浜さん、玉井さん、小田桐さんの子育て編、防災から地域の問題に広がっている吉本さんの活動、保健師の研修(「保健師ジャーナル」第64巻第4号の野々村さんの寄稿等参照)、桑原さんのケースワーカー編、さらにはメンバーの協力による企業の危機対応研修や神戸市職員のまちづくり系の研修におけるクロスロード(神戸市の「コーディネーター養成研修」については「自治フォーラム」2008年4月号参照)に広がっています。

◇研究会の今後

研究会は、基本的に「ゆるやかな」団体です。メンバーに職員以外の方も加わりました。今後も、メンバーの自由な活動が、クロスロードの地平線を広げることでしょう。同時に、様々な方々との交流の輪が広がり、それが次の活動分野につながっていくことでしょう。

(文責　柿本雅通さん)

クロスロードとケースワーカー

～出会い。運命の赤い糸はある。～

運命の赤い糸。それは、次の言葉から始まった。

「ケースワーカーは、右に進むか左に進むか迷う場面が多い。しかも、正解は何処にも書いてない。ケースとは一対一の関係であり、その場の“空気”を知っているのは、ケースワーカーだけである。そのケースワーカーが下した判断は、結果がどうであれ、絶対的に正しい。」

これは、私がケースワーカーとなって最初のスーパーバイザー（上司）の言葉である。それからずっと、心に焼き付いて離れない。ケースワーカーには、それだけの責任があるということを肝に銘じ、“空気”を掴むことに貪欲にやってきた。判断に迷うからこそ、動き、そして考え、そして悩み、・・・これらを繰り返すことに貪欲になった。

その一環として、ケースワーカーを中心メンバーとした自主勉強会を立ち上げた。この会の活動を通じて、西さん（神戸クロスロード研究会）と出会った。ファシリテーションと出会った。そして、クロスロードと出会った。衝撃が走った。

西さんの魅力に惹かれたのはもちろん、ファシリテーションへの興味は溢れ、クロスロードの可能性への期待感は膨れ上がっていった。クロスロード・ケースワーカー編をやりたい！　やらねばならぬ！！　やろう！！！・・・そして、実践へ・・・。赤い糸は伸び続けた。

神戸クロスロード研究会の支援のもと、上述の自主勉強会に於いて、はじめの一歩を踏み出した。その際、クロスロードが、さらには、設問づくりというプログラムが、研修ツールとして、如何に優れものであるかということを、あらためて、強烈に感じた。

そして、ケースワークは、極めてマニュアル化しにくい仕事であるということが再確認できたとともに、マニュアルにできない部分のスキルアップに、クロスロードが極めて効果的であることが実証できた。

クロスロードは、まさに、ケースワーカーという仕事の性質上、ジャストフィットである。加えて、参加メンバーが、このクロスロードに取り組む過程の中で、自然と習得していくことができる、“ちゃんと聴く”“ちゃんと話す”といった基本姿勢は、ケースワークに欠かすことの出来ない、基礎中の基礎でもある。

また、ケースワーク上の知識は、従来型の研修で学んでいくことが、勿論必要であり、大切であるが、これに上乗せして、ケースワーカーが、マニュアルにできない部分を高め合っていくことで、この仕事の“面白み”“旨み”を感じ取れるようになるのだと考える。

更に、ケースワーカーには、困った場面や迷った場面が、多々あることが共通認識となり、しかも、各自が類似したシーンを体験していることが多いのも、この仕事の特徴であろうと思われる。設問づくりに於ける、ネタだしには事欠かず、各自の回答のみならず、その判断根拠も、多様性を学ぶのに繋がった。

クロスロードとケースワーカーの出会い、それは、参加メンバーのスキルアップと併せて、やる気高揚・資質向上の成果も上げているとも言える。ケースワーカーは、常に市民と直接接しており、そのケースワーカーの成長は、そのままイコール、市民サービス向上にも繋がっている。

この運命の赤い糸、次はどこへ・・・・・・・・・・・・

（神戸市北福祉事務所保護課主査　桑原　潤さん）

K
CROSSROAD
BE
神戸クロスロード研究会

コンプライアンス推進にかかる職場研修でクロスロードを活用

（経　緯）

・神戸市では、平成１９年１月に「神戸市政の透明化の推進及び公正な職務執行の確保に関する条例」（コンプライアンス条例）を施行しました。

・法令、倫理原則等の遵守や、市民からの要望等に誠実かつ適正に対応することなど職員のコンプライアンス意識の定着を図るために、毎年、各職場において職員全員を対象にした「コンプライアンス推進にかかる職場研修」を実施しています。

・過去２回の研修では、コンプライアンス推進責任者である所属長が、条例のマニュアル等の資料をもとに事例解説をしていくというものでした。解説に当たっては、職員の意見や考えも発言してもらえるように事例設定を工夫するなどしてきましたが、テーマがテーマだけになかなか議論が進みにくく、マンネリ化などの問題がありました。

（今年の研修）

・今回で３回目となる研修では、事例をクロスロード風にアレンジした職場討議事例研修を実施しました。

・窓口での市民応対などで実際に起こりやすい場面に対して二つの対応方法を設定、それぞれをカード化（事例参照）しました。研修参加者全員がいずれかのカードを選択し、クロスロードと同じく、一斉にカードを表向けに出し、各自がカードを選んだ理由を発表し、討論を行ってもらい、最後に、推進責任者に講評してもらうという流れにしました。

・少人数のグループに分かれて実施してもらうことや、ファシリテーター役は所属長以外の担当職員にしてもらうなど出来る限り議論が活発化しやすいようなルール設定にしてみました。

【参考】

事例（不当要求）

あなたは区役所の事務担当者です。同僚が窓口で市民応対をしており，聞いていると市民から要望を受けているようです。その要望は，これまで多くの人に対して慣例的にお断りしてきた内容と同じです。相手の方は何とかして欲しいと執拗に要求している様子です。同僚は何度も「できません」と説明していますが，相手は全く理解を示している様子はなく，ますます大声を出し，机を叩きながら「課長を出せ！」と叫びはじめました。相手は見た目も少し怖い感じで，口調も激しく，周囲の来客の注目も集まり始めました。係長は不在，課長は現在在室しています。あなたはどうしますか。

Ａ　自らは窓口には出ない。
Ｂ　窓口に出て自分も一緒に対応する。

事例（飲酒運転）

あなたは，自治会等地域活動の担当者です。ある土曜の夜，あなたは職務で地元自治会の会館で行われる会合に出席しました。自治会館に集まった人の中には車できている人もいます。会合終了後，日頃からお世話になっている自治会長から呼び止められ，今からここ（会館）で少し飲まないかとのお誘いを受けました。自治会長は大変な酒好きとして有名で，飲み出すといつも深夜まで飲み続けると聞きます。しかし，あなたは，翌日の日曜日は早朝から家族でドライブに行く約束をしています。

あなたはどうしますか。

Ａ　飲む
Ｂ　飲まない

（感想）

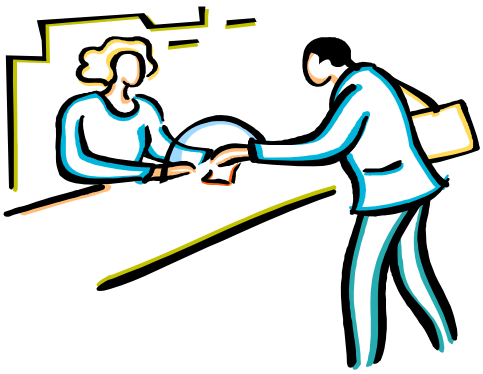
・今回の研修では、座布団の枚数を競うなどのクロスロードのゲーム的な要素はありませんしたが、各自必ずどちらかのカードを選び、その理由を述べなければならないため、議論が活発化し、昨年度の研修と様変わりした職場も多かったようです。推進責任者へのアンケート結果でも、クロスロードを取り入れた今回の事例討議スタイルの研修について、良かったという意見が95%を超えていました。

○アンケート結果抜粋

「活発な議論が出来た」
「部下一人ひとりの意見が聞けて良かった」
「講義形式より一人ひとりの意識が高まり効果的」など

・来年以降もクロスロードを取り入れ、研修参加者の問題意識を高める研修を実施していきたいと考えております。

（神戸市行財政局コンプライアンス推進室主査
藤岡　健さん）



パナソニックで、クロスロードに初挑戦！

２００７年１０月２５日、松下電器産業（株）(現　パナソニック(株)）にクロスロード研究会の西さん、浜さんが、ファシリテーターとしてやって来ました！聞くところによると、企業で実践するのは始めてだとか！クロスロード＠パナソニックの様子をレポートします。
（パナソニック(株)情報企画グループIT革新推進チーム
大野敦子さん）
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

◆クロスロードセミナーの狙い

松下電器の社内セミナーにて、**「経験から学ぶ、ファシリテーション　～ＢＣＰ作成に向けたプロセスを事例に～」**をテーマに、クロスロード研究会の西さん、浜さんをお招きしました。今多くの企業では、阪神淡路大震災の教訓から、災害や事故が発生した際、重要な業務が止まらないこと、万が一止まったとしても日常から備えておくことで早期に復帰できることが求められています。我社でも例外でなく、ＢＣＰ（事業継続計画）の中に、様々な観点からリスク対策を盛り込んでおります。そのような中、ＢＣＰをつくる上で、過去の失敗や経験を仮想体験によって共有し、リスクマネジメントに活かすことが重要であると考えたわけです。また経営とは、限られた情報の中で如何にスピーディに正しく決断するかが重要であり、日々ジレンマの連続です。そういった意味でも判断力を鍛えるためのツールとしてクロスロードが有効ではないかと考え、弊社のマネージャー層、現場で活躍するリーダー層に、クロスロードを経験してもらいました。

◆セミナー当日

セミナーには、３０名ほどの様々な職種、部門の社員が集まりました。参加型のワークショップ形式でのセミナーは始めての試みです！はじめに西さんからクロスロードのコンセプトについての説明がありました。その中で、阪神・淡路大震災のときの「実話」がもとになっていること、文科省の研究プロジェクトの成果物であること、クロスロードとは、進路を決すべき「岐路」を表すものであることを共有しました。その後、ファシリテーターを浜さんにバトンタッチ、ゲームの簡単な解説の後、阪神・淡路大震災の際の、神戸市役所員のジレンマを題材に、クロスロードに挑戦です。

「あなたは避難所の食料担当です。被災から数時間。避難所には３０００人が避難しているとの確かな情報が得られた。現時点で確保できた食料は２０００食。以降の見通しは、今のところなし。まず２０００食を配る？Yes（配る）or　No(配らない)？」

浜さんによる問い投げかけの後、一斉にYes,NOのカードがテーブルに踊り、ざわめきと共に会場の温度が一気に上昇します。グループ毎に、カードに対する根拠を一人ひとり順番に語らい、お互いの考え方の違いを感じました。また、西さんの実際の体験談により、震災時、如何に究極の状態であったのかを思い知らされると同時に、少ない情報の中で判断を下さなければならない難しさを感じました。５～６問ほど神戸編の問いを続けた後は、いよいよ、パナソニック編の登場です。パナソニック編では、事前にセミナー企画委員中心に、「困ったこと」「迷ったこと」「しくじったこと」の体験を切り口に、実際に社内で起こりそうなジレンマの状況を想定し問いをつくりました。

「Ａさんは幹部候補であり、あなたは多大な期待を寄せています。大規模プロジェクトのリーダーにＡさんを任命しましたが、プロジェクトが遅れ、関係者からもＡさんに対する不安の声があがっています。Ａさんを交代させる？Yes(交代させる)or No(交代させない)」

問いづくりのポイントは、「Ｙｅｓ／Ｎｏ」で応えられる問いにすること、あまり細かな設定はせずに、色々な状況を想定させることです。皆さん自分の経験談も交えながら、熱く語り合い座布団の数を競い合いました。

◆セミナーを終えて

セミナーの最後にアンケートを実施しました。セミナーの満足度は高く、多くの方から沢山の意見を頂きました。「クロスロードは漠然とした問いかけに、答え（Ｙｅｓ／Ｎｏ）から入るので、その後の討議がしやすいツールだと思った。何かを伝えたい、気付いて欲しいセミナーなどで活用して行きたい」「反対の意見について聞けるのと、判断する難しさを改めて感じました」「クロスロードについて、ファシリテーションについて考える１つの材料になった。是非活用したい。」「自分と反対の意見は新鮮。合意形成の重要性を理解しました。また「行政」に対する考え方が少し変わりました」など、好意的な意見を多数頂きました。社内でこのような形で参加型のワークショップをやること自体初めてだったのでドキドキでしたが、本当にやってよかったです。

地域の子育て支援をもっと楽しく、そして「相手の立場に立って考えてみよう！」を実感

１９年度に神戸市須磨区北須磨支所子育て支援係では、地域の子育て支援者の集まりで、クロスロードを行いました。

北須磨支所内では、小学校区を中心に地域の子育て支援者の集まり「地域連絡会」が１０ヶ所で開催されています。メンバーは、主任児童委員、ふれあいのまちづくり協議会（自治会、婦人会、老人会、子供会、児童館、小学校、民生委員児童委員協議会、青少年育成協議会など各種団体等の代表者を中心に組織され、地域福祉の向上を目指し、各種の福祉活動や交流活動等を展開する組織）からの代表者、保育所、幼稚園、小学校の先生などが中心ですが、老人会や婦人会、地域の子育てサークル、学校の保護者などが入っているところもあります。メンバー構成・開催回数や発足時期は、それぞれの地域の事情で異なります。しかし、それぞれの所属での活動を紹介する情報交換にとどまらず、他のメンバーと情報を共有し、より発展的に地域の子どもたちのためにできることを考えていくことが会の目的です。そのためには、地域の子どもたちとその保護者の立場に立ちどんなことができるのかを考え、メンバー同士が率直に意見交換をすることが不可欠です。そのためのしかけとして、クロスロードを活用しました。

１．子育て支援クロスロードって？

クロスロードの設問は、普段から子育て支援者や子育て中の親に接し、その中で彼・彼女たちが抱えている子育ての悩みやジレンマを肌で感じている保健師が、議論を重ねて作成しました。各地区の地域連絡会ごとに１回、計10回、概ね１００人が参加しました。

＜設問例＞

【児童虐待】あなたは・・近所の人

夜１１時ごろ、子どもの泣き叫ぶ声が続けて３晩聞こえた。バシッと叩くような音もする。夫(妻)は放っておけと言うが、通報する？

YES／通報する・NO／通報しない

【小学生】あなたは・・近所の人

夜７時。公園を通りかかると、小学生くらいの子どもが一人で遊んでいる。子どもに声をかける？

YES／声をかける・NO／声をかけない

【母親】あなたは・・・子育てサークルに参加している母親

ほっとするのはサークルだけなのに、お世話をしてくれている地域の方から、手伝って欲しいと言われた。続けてサークルに参加する？

YES／参加する・NO／参加しない

設問①では、通報する人、しない人の割合は、ほぼ同じでした。しかし、その理由は通報をしない人でも「まずは、近所の人に聞く」「親に声をかけてみる」と答えなんらかの行動をとろうとしていました。この設問では、児童虐待を予防する上で重要なエッセンスについてのノウハウや情報を共有することができました。

設問②では、声をかけない人では、「知らない人から声をかけられると不審者と間違えられる（特に男性）」という意見もでました。このことから、日頃から顔見知りになることが大切だという話にも発展しました。

設問③では、答えは様々でした。「自身の子育て中には、ほっとしたかったので断る」「参加しているなら、できることは手伝うべきと考えているので承諾する」などの意見がありました。この質問は、母親の立場にたって考えるということが難しかったようです。

（次ページへ続く。。。）

子育てクロスロード(続き)

３．参加者の感想は？

クロスロードを終えた感想は、「いろいろな考え方があるのだとわかった」「自分の考えを整理できた」「世代や性差で行動が変わるのだと思った」「これまで、話をしたことがなかった人と話ができた」などがありました。中には、「自分の今の立場にこだわって回答をしてしまった。もっと、柔軟な発想が必要」「金座布団を狙ったけれど、取れなかったことが残念」とゲームを楽しむ方もありました。「言いにくいことも、『金座布団狙い』と言う手がありますよ」と言って、参加者の意見を出しやすくするコメントも行いました。

参加者の感想から、クロスロードのねらいである①いろいろな考え方、感じ方があることを知る　②問題解決の方法を知る　③参加者同士の交流　が、ほぼ達成できたことがわかました。

４．「子育て編クロスロード」活用の提案！

クロスロードの活用として、母親同士が育児で悩んでいることの問題解決やエンパワーメントを図ることができるのではないかという話しもでました。実際に、小学校のＰＴＡでやってみたいという保護者もいました。サークルやＰＴＡなどの場で、深刻にではなく、ゲーム感覚でやってみることもできるでしょう。また、地域連絡会のメンバーには、子育てに関する設問を募集しています。設問を考えることも、それぞれが課題に感じていることを表現する手段となるからです。保健師が作った設問と合わせて、クロスロード「子育て編」の設問集を作成予定です。皆様お楽しみにお待ちください！！

（神戸市須磨区北須磨支所保健福祉課子育て支援係
玉井光恵さん）

児童館指導員スキルアップ研修会を終えて
～クロスロード「設問をつくってみよう」～

先日、児童館指導員スキルアップ研修会でクロスロードをテーマに研修を行いたしました。
児童館は、子どもはもちろん子育て中の親子が多く利用する施設です。午前中には、赤ちゃんから就園前の幼児を連れた母親が多数来館して、さまざまなプログラムに参加しています。

児童館指導員は、参加されている母親に親子のふれあいあそびを指導したり、日々の子育てに関する相談にのることもあります。子育ての経験がない若い指導員にとって、母親への対応は子どもを指導するよりも難しいことです。

そこで研修会のテーマにクロスロードを取り入れ、母親との関係づくりや参加されている母親同士の円滑なコミュニケーションのきっかけづくりに活かすために実施しました。

研修会では、まずクロスロードを体験してみました。「子育てジレンマ・CRSSROAD　～あなたならどうする？～」から設問を３つ選択し、ゲーム感覚でグループディスカッションを行いました。

出席者の感想では、「自分の考えはいつも多数派で、誰もが思っていることと考えていたけれど、全然違う考え・意見を持っている人が何人もいて面白かった。」「設問によってYES、NOが判断しにくいところが、カードを最終的に出すことにより、疑問が答えによって明確になった。」「今回はじめてのクロスロードでした。とっても楽しく、またやってみたいです。」など、始めて体験したクロスロードが新鮮に受け止められたようです。

その後、日頃の仕事の中で「困った」「迷った」「しくじった」体験を出し合い、子育てに関する設問を作ってみました。「設問を作るのはなかなか難しいものだと思った。」「クロスロードを児童館で実践するためには、更に研修が必要だと思いました。」など、実際に設問を作って児童館で活用するには、研修を重ね進めていく手法を身につける必要があると思います。

出席者の『きょうのふりかえり』シートでは、この手法だと話がしやすく、問題提起もしやすい」「今回の体験を活かして親子館事業にも取り入れていきたい」など、クロスロードが子育て中のお母さんのジレンマやノウハウ共有に有効なツールであることが共通認識できたと思います。

今回の研修をきっかけに、今後も子育て支援の取り組みの中でクロスロードを取り入れていきたいと思います。

（神戸市須磨区社会福祉協議会
子育てコーディネーター主幹　小田桐　和代さん）

地域に活かすクロスロード
ー 同一地区で３回のクロスロードを終えて ー

【はじめに】
　神戸市の地域における自主防災組織を「防災福祉コミュニティ」(通称「防コミ」)と呼んでいます。これは、従来からあった地域団体の活動を尊重しながら、その活動を地域防災に組み入れようというものです。防コミに指定されると、その地域に防災倉庫や防災器具が配布され、防コミ活動に助成金が交付されます。
　私が住む星和台・鳴子防コミは神戸市の北部に位置する住宅地にあり、この助成金で３回のクロスロードを実施してきました。
　継続してクロスロードを実施できた理由のひとつは、星和台・鳴子地区では元々地域コミュニティ活動が活発で、自治会・婦人会・ふれあいのまちづくり協議会・青少年育成協議会・民生委員児童委員協議会などで永年ボランティア活動に勤めてきた方々が防コミの役員を担っていたことです。
　ここでは、第１回から第3回のクロスロードを通じた私の「気づき」をご紹介します。

【第１回クロスロード】（平成１８年８月２７日）
　地域にクロスロードを根付かせたいという思いから、まず注意したのは、クロスロード参加者をできるだけ異なった構成員（性別・職業・年齢）を集めることでした。学校開放委員の協力を得て中学生５名を迎えることができました。役員会では市販の震災問題の中から中学生でも議論できる問題を選びました。
　参加者から「息子や娘でさえ話し合ったことのない問題を真剣に話し合うことができた。中学生がここまで話ができるとは思わなかった。感動した。」いう声がでました。さらに、口コミから「次回のクロスロードには声をかけて欲しい。」と要望もでました。
　気づいたことは、役員から「クロスロードの特色であるゲーム手法が地域問題ＷＳ手法としてすばらしいものがある」と評価されたことです。

【第２回クロスロード】(平成１９年８月２６日)
　クロスロードはゲーム手法を用いたＷＳです。とすれば、地域ジレンマ問題をクロスロードに採用できるはずです。役員会から身近な地域ジレンマ問題を提案し、クロスロード問題に採用しました。地元住民に地域ジレンマ問題をお願いすると生の事実が提供されます。この時に注意したのは、できるだけ表現を一般化することと議論が分かれる内容に訂正することです。そのために役員会の中でクロスロードを実施しました。
　この年から高校生も参加したのですが、「大変楽しかった」という理由で第３回クロスロードにも参加してくれました。
　気づいたことは、青少年育成協議会会長から「このＷＳは世代間交流にすばらしく効果的だ」と評価されたことです。

【第３回クロスロード】(平成２０年８月２４日)
　役員会でクロスロードが完全に認知されました。クロスロードに使う問題が役員から今まさにかかえている問題をYes/No形式になって提案されました。クロスロード当日は、参加者の８割以上が新しいメンバーであったにもかかわらず自然とグループリーダーができて、スムーズに進行できました。役員から「３回目の効果だね」という賞賛の声をいただきました。

　私にも３回目の効果がありました。次の２点の気づきです。

第１の気づき：「Yes/No形式になじんだとしても地域住民を対象としたゲームになじまない問題がある」
　役員会は以下の問題を不採用としました。さて、皆さんはどうお考えになりますか？

私的な（わがままな）感情問題
　「福祉センターでの預かり保育中、Ａさんはきらいなので、うちの子とＡさんの子をいっしょに遊ばさないで欲しいと言われた。預かり保育の責任者であるあなたは、Ａさんの子供とは遊ばせない？」
　提案者として困った事案であったとしても、こんなむちゃな苦情について、中高校生を含む住民に議論してもらうに値しない、という理由です。

特定の個人を対象とする問題
　「小学校の登下校時に近くに住む高齢のＢさんがよくバイクを運転しており、スピードを出すうえ運転も危なくて仕方ない。自治会の役員であるあなたは、Ｂさんに注意する？」
　「小学校の登下校時に」という地域問題らしい条件がついているが、提案者の真意はＢさんをこころよく思っていないのだろう。「高齢」「バイクに乗る」「スピードをだす」と言えば、地域住民はＢさんを特定してしまう。特定の個人を対象とする議論はすべきでない、という理由です。

(次ページへ続く)

地域に活かすクロスロード(続き)

第２の気づき：非常時における参加者の判断を問う問題と地域ジレンマ問題とでは、参加者に問題に対する身構え方に違いがあることに気づきました。

① 非常時における参加者の判断を問う問題を扱う場合の参加者の心構え

「通常時の規範に照らすとダメと判断されても非常時の高度な判断を許すべきか？」を考えます。

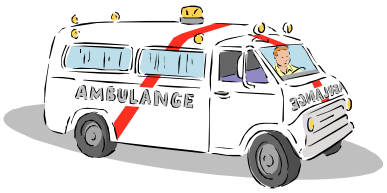
たとえば、「震災時、責任者であるあなたは、出動した救急車に病院から消防署に帰る際もサイレンを鳴らして緊急走行するように指示しますか？」という問題を考えてみましょう。

法律的にはダメとされる行為が震災という非常時まで従わなければならないのでしょうか？

震災当時、責任者である私は救急隊員に緊急走行で帰ってくるよう指示しました。救急隊と電話連絡がつかず、次の救急事案が待っている可能性が高かったからです。

参加者になじみのない非常時の状況を問題にした場合、参加者は設定状況になじみがないため安心してゲームに臨んでいます。

地域の仲間で侃々諤々



② 地域ジレンマ問題を扱う場合の参加者の心構え

マナー・ルールに照らして、その規範は例外を認めないのか？を考えます。

たとえば、「ゴミをだそうとすると指定されたゴミステーションの回収が終わっていた。しかたがないので、他のゴミステーションにゴミを捨てますか？」という問題を考えて見ましょう。

指定されたゴミステーションに捨てるのはマナー・ルールですが、いかなる場合でも他のゴミステーションにゴミを捨ててはならないのでしょうか？

マナー・ルールはまだ強固な規範になっていませんので、正解がありません。正解がないと分かっていても身近な問題であるだけに、やはり他のメンバーのYes/Noが気になります。その分、参加者はゲームに参加する前から身構えているようです。

地域ジレンマ問題を題材にクロスロードを実施してきた私は、「クロスロードは皆さんの経験や価値観がYes/Noに影響しますね。その違いを感じ取ってもらうゲームなのですよ。」と説明し、参加者の気持ちを和らげる努力をしたつもりでした。

ところがです。

浜さんがまとめてくださった「振り返りシート」を見て、自分の至らなさを発見し、大いにへこみました。

・（気づいたことは）自分が常識の範囲内でよかった。

・（自分に足らないと思ったのは）座布団３枚しか取れなかった。非常識？

７問で７枚のザブトンを勝ち取った方がいるということは、きっと１枚も取れなかった方がいます。私は進行役兼コメンテータとしてこのことに注意を払ってきたつもりであったにもかかわらず、最後になって「**常識を活かして**考えてください」と言ってしまい、さらには「**最優秀賞**を差し上げます」とまで言ってしまったのです。

地域ジレンマ問題は、参加者にとっても身近な現実の問題です。ファシリテータは参加者の気持ちを汲んで細心の注意を払って進行しなければなりません。地域ジレンマを問題とするクロスロードの場合、ファシリテータは、コメンテータを兼任しないで、進行にだけ細心の注意を払うのがベターであると思いました。

さて、皆さんはどうお考えになりますか？是非、私のような失敗をしないでください。

私はクロスロードを地域に根づかせるのに最適の環境にいると思っております。その環境にあって、ファシリテータとして考えさせられた問題を提起しました。

（星和台・鳴子防災福祉コミュニティ
吉本　和弘さん）

金ざぶ論争

神戸クロスロード研究会は、メーリングリストを設けて、メンバー間の情報交換を行なっています。その中には、こんな議論も。(「研究会」ですから)

議論の発端は、伊賀ツアー(Topics参照)における参加者の疑問。「多数派予想のゲームと言いながら、1人意見が違うと、なぜその人だけが金座布団をもらうのか。」普段、意見の取りまとめに苦労されている地域の方からすれば、当然の疑問です。これについて、メンバーは、こんな意見交換をしました。(ご紹介する意見は、メールの抜粋や要約です。)

吉本）伊賀でのクロスロードお疲れ様でした。(星和台・鳴子防災福祉コミュニティでのクロスロードの「ふりかえりシート」の記録の中に)「（自分に足らないと思ったのは）座布団３枚・・・非常識？」という感想にへこみました。実は、皆さんの価値観や経験がイエス/ノーに影響すると説明していたのですが、後半になって、「常識を活かして」という言葉を２回使ってしまいました。ファシリテーターとして最低の発言だったと反省。

西）ファシリテーターの一言は、やはり影響力大きいですね。そのためにもふりかえりの内容からフィードバックをもらうのはファシリテーターにとっても大変重要だと思います。今回の反省は「金座布団」について、もっと歯切れの良い説明ができなったか。また勉強したいと思います。　※西さんは、ＭＬ外で、「金座布団は、少数派所属が続いて座布団がもらえない人も楽しく参加させる仕掛けだろう」ともコメントしています。

柿本）私も金ザブの十分なコメントができず、反省。多数決という当たり前のルールの中でどう捉えるか、の探求が抜けていました。全員合意の前の落とし穴なのか、それとも多数決ルールとの一貫性を持たせるべきなのか。また、以前にも気づいていたのですが、金ザブの影に多数派が隠れてしまう点も研究する必要がありそう。

吉本）「少数意見を最後まで尊重する」という説明もありますが、これは後からつけた理由ではないかと思っております。地域ジレンマにかかる新作問題を中心に地元でクロスロードを続けてきて思うのは、意見が分かれるように配慮した問題をつくるのですが、それでも意見が分かれなかったときの最後の処方ではないかということです。

東末）体験型研修のデザインは本当に難しく、参加者お一人お一人の「今、ここ」的な目の前のニーズで「参加が目的のWS」になるのか「目的があっての参加になるWS」になるのか、が決まります。クロスロードでも、然るべきところでは、ゲームを捨ててでも深みにはまる「お付き合い」を率先してやらなければならないんだろうと。体験型学習はまだまだ発展途上の段階。適応力を高める、持続可能な仕組みの開発には、「こうじゃないとダメよ」とやっぱり言ってしまう民生委員のおばちゃんや「金座布団」にハテナと思うと言われたおじちゃんの力が欠かせない。ゲーム性を重視し過ぎて目の前の人のジレンマとの出会いから逃げるのではなく、しかし遊び心をもって軽やかに出会いを促進する。そんな場づくりのためにファシリテータはどんなカードをもっていればいいのか？

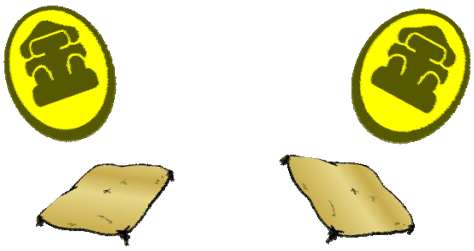
桑原）クロスロードは、多様性を学ぶのに、メッチャ優れものですよネ。その効果をより一層引き出し易くするグッズとして、金座布団は、促進剤のような働きもしているように思います。生活保護の仕事上の判断の多くは、文字通り、ケース・バイ・ケース。少数派意見か多数派意見か、ではなく、多様性を突き詰めていきたいなと思っています。

―ここで開発者からの回答を紹介―

矢守先生）私は、99%、「自分の意見を言うルール」で実施しているので、この件に関する質問を受けたことがないのです。こちらのルールであれば、文字通り少数意見を重視するため、（天の邪鬼的なものも含め）多くの人が考えていない面（死角）を発掘するため、とねらいを説明しています。

吉川先生）私は、多数派予測でやることが多いのですが、「金ざぶ」にしろ、「多数派予測」にしろ、「隠れ蓑」ツールなのだと実感しています。つまり、自分の意見を正々堂々といえる人ばかりではないということです。
（災害に限らず）緊急時に限って「こんな時にそんなことというか！？」という人が出てくるものだと思っています。そういう「予想外」の他者に少しでも備えておくためには、「多数決に安住しない」ということが大事なのかなあと思います。「私たち同意見だよね。」といっている、その誰かが、まさかの時に「えっ」というようなことを言い出すかも・・・

（次ページへ続く）



金ざぶ論争(続き)

―再びメンバー―

浜）星和台・鳴子防コミのふりかえりシート記録、伊賀の金ザブ質問、それから、今までいくつか行ってきたクロスロードの中に出てきたふりかえり（「自分の意見が多数派で安心した」）などからは、共通の印象を受けます。すなわち、

単純に「多数派になった！」→「ゲームに勝ってうれしい！」と思う人だけでなく、普段は多数派で物事を決定することが多いことから、経験的に「多数派意見」＝「正しい、あるいは常識的な意見である」という感覚と直結してしまい、

「多数派意見」＝「採択される意見」→「勝ち」→「座布団がもらえる」（正しい・常識的意見）

「少数意見」＝「採択されない」→「負け」→「座布団がもらえない」（間違った・他の人と違う・非常識な意見）

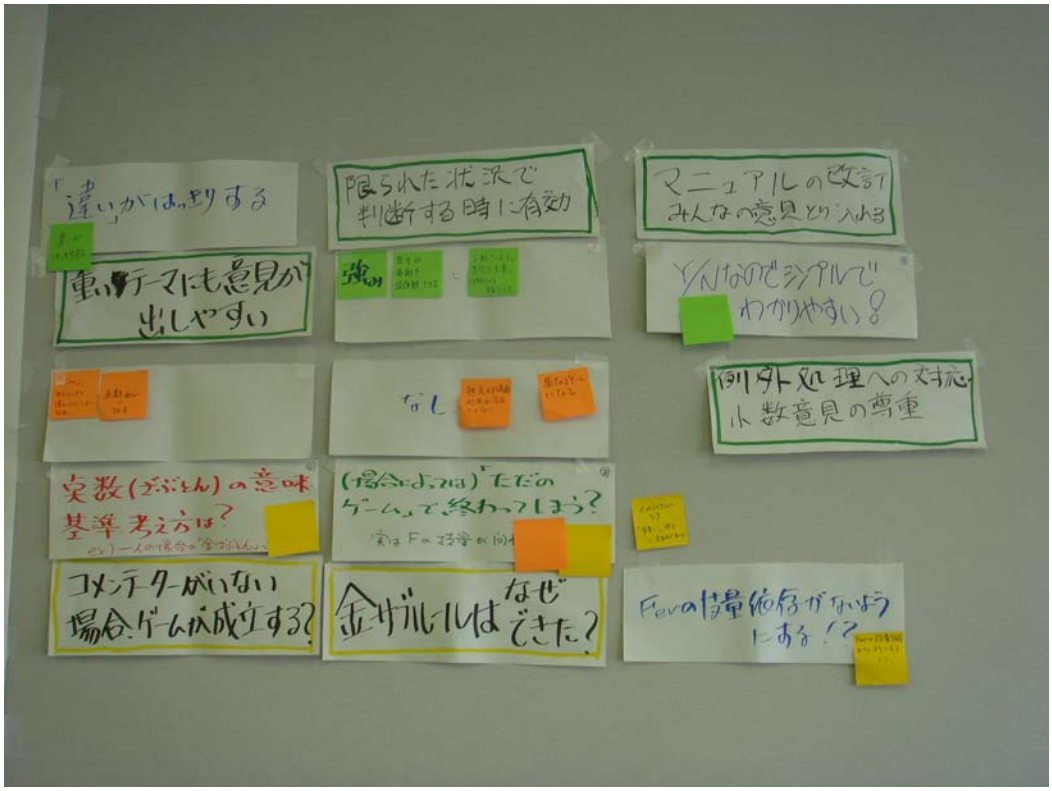
というような思考回路になっている人も少なからずいるのでは。

解決法は「ゲームに徹する（多数派予測）」ことを強調することでしょうか？

柿本）全員一致の前に、「もう一度考えてみよう」というキッカケを金座布団は与えてくれます。桑原さんが言うような「多様性」を発掘してくれます。「金ザブはこういう意義ですよ」と言うより「ゲームを面白くするためのルールですが、こういう効果があります」という説明のほうが納得しやすいように思いました。大切なのは、ゲームで盛り上がることではなく、研修として行なう場合は、何を持って帰って、どう生かしてもらうかでしょうね。

栗田）金ザブには、オリジナリティ尊重に近い趣旨が隠れているようにも感じました。また、ゲーム参加者のうち、テーマに関心の強い人や経験者がたった１人だけ混じった状態でこの手のゲームをした場合、その１人だけが本当の意味でのジレンマの苦悩の意味を知っている場合もある。しかし多数決原理だけでこのゲームを行えばその人は少数派の意見になる。他人の目からは見えにくい苦労した人の発言ほど、例えマイノリティであっても非常に傾聴に値する内容であることが多い。金ザブルールは、「マイノリティの方の深い苦労をも皆でシェアし合える」救済方法がある点で非常に有効だとも思っています。一般の方々への説明は確かに難しいですが、「多数決に安住しない」(吉川先生)、「多様性を学ぶ」(桑原さん)のご意見に共感をもって支持します。これに敢えて付け加えるのならば、「民主主義の大原則は多数決です。しかし・・・一つだけ逆転の例外を認めています。」「みんなの意見が一致すれば果たして、本当にそれでいいのでしょうか？実際の経験者は何に悩んだと思われますか？一般の人の陥りやすい危険な死角もあり得るのじゃないでしょうか」「だからこそ今日は、少数の、あるいは１人の人の意見にも耳を傾け合いましょう」金ザブのルールはそれを気づかせてくれる点にある、そう信じています。

さて、みなさんは、どう思われますか。



2007年5月ファシリテーションフォーラムでも座布団ルールが議論に。。。（新聞12号をご覧下さい)

私のクロスロード論

平成16年3月に東京フォーラムで開かれた「大都市大震災軽減化特別プロジェクト」の中間報告会においてその原型に接して以来、「クロスロード」との付き合いも、早５年近くになります。平成18年11月23日、大阪の千里中央で開かれた「クロスロード・サポーターの集い　大阪会場」でも発表したのですが、この特集号の場も借りて、常日頃思っていることをちょっとまとめてみました。

１　クロスロードの三要素

クロスロードという「システム」を、私はいつも「場」「設問」「ファシリテーター」の３つの視点で考えています。

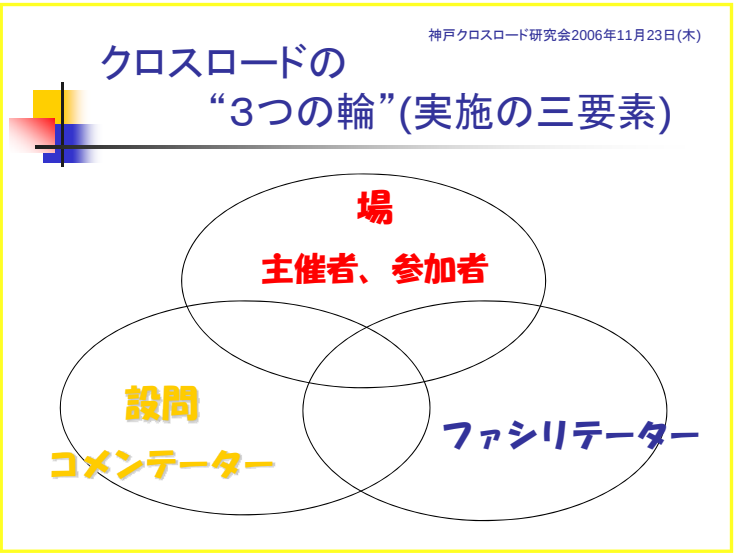
⑴　場

「場」には、クロスロードを実施する主催者と参加者の２つが含まれます。主催者は、クロスロードを実施する目的と、参加を呼びかける役割を持ちます。会場における参加者の班割りを決めるのも主催者です。

班割りに際しては、多様な意見や経験を理解・共有するために、年代や地域、職業など、できるだけ色々な分野の方が１つのテーブルを囲めるように注意します。これがうまくいけば、半ば成功したも同然でしょう。

⑵　設問

♪　設問は、主催者の目的を参加者に伝える、文字で書かれた唯一の手段とも言えます。ご存知のように、クロスロードは、あいまいな設問の中で、様々な状況を想像することも参加者に求めています。災害対応であれば、過去と同じ災害が次も起こるという保証はなく、しかも、災害現場では情報の入手は不十分です。そのような状況を疑似体験することも、防災研修として行なう意義になります。参加者は、判断の手がかりを求めて、更なる情報・条件を要求しますが、できるだけシンプルな設問であることが望ましいのです。



もっとも、単に多様性を理解するだけでは研修として不十分な設問や、参加者に知らせなければならない事項もあります。それらをカバーするのがコメンテーターの役割です。

♪　良い設問のもう１つの条件は、設問の情景がすぐに想像できるという「映像性」だと私は考えています。

与謝蕪村の「五月雨や大河の前に家二軒」は、南画の大家でもある蕪村らしい絵画的な名句ですが、こんな設問にしたらどうでしょう。

五月雨や大河の前に家二軒。これ、あなたのおうち。 さて、避難する？　ＹＥＳ／ＮＯ

避難するしないはともかく、状況は、すぐイメージできるのではないでしょうか。神戸編の設問は、神戸市職員の実体験に基づくだけに、その映像性は強いと思います。次の設問も映像化力が強いと思いますが、良い設問は、それがどのような仕事なのか、課題は何なのかをすぐに参加者に理解させることができると思います。

♪　設問を作る過程が研修になるということは、早くから理解されていました。これについては、小田桐さんの稿や西クロスロードの紹介（クロスロード新聞第12号)をご覧ください。

⑶　ファシリテーター

クロスロードをコンサートに例えると、「場」が興行主と聴衆、「設問」が曲目や作曲家、「ファシリテーター」は演奏家でしょうか。もっとも、クロスロードにおける演奏家は、参加者自身(時には、コメンテーターも含む)でもあり、ファシリテーターは、指揮者でしょうか。

ファシリテートの技術については、専門的な方もおられますから省略しますが、クロスロードのファシリテーターは、YES/NOが分かれたときのコラボレーションはもちろんですが、どちらかに偏ったときは、逆に意見の対立を掘り起こし、課題を顕在化させ、多様性の共有と理解を図らなければなりません。従って、設問についての理解も求められると言えそうです。

実際には、例えばコメンテーターとファシリテーターを1人で行なったりして、三要素が役割分担できる場合は少ないでしょう。ただ、実施における役割分担やクロスロードの全体像を考えるとき、この三要素論は有意義だと思っています。

(次ページへ続く)

私のクロスロード論(続き)

２　クロスロードの機能論

⑴　クロスロードのそもそも

元々クロスロードは、阪神・淡路大震災における神戸市職員の災害対応の経験を伝承する手法の一つとして開発されました。しかし、その本質的機能は、すぐれたコミュニケーションツールであり、多様な経験・知恵の共有と相互理解にあるといえます。その機能が様々な分野に生かされていることは、この特集号の各稿で納得されることと思います。

⑵　悩む力

クロスロードが、震災の経験という、厳しい状況を扱う手法であることを原点としていることは、普段直視したくない、しかし重要な問題を複数の人たちと一緒に考える機会を提供する手法であるということでもあります。姜教授のベストセラー名を借りれば「悩む力」を育む場になるかもしれません。

⑶　Ｙｅｓ／Ｎｏ論

さらに言えば、神戸編では未曾有の震災における判断の岐路を設問としていますが、Ｙｅｓ／Ｎｏの選択だけでなく、その違いの意味を考えることで、新しい考えを引き出す可能性もあります。対立する語句を並べて新しい意味を主張する語法を「オクシモロン」と言いますが、クロスロードの進め方によっては、その可能性があると思っています。

⑷　小さな社会

多様な参加者で構成される「場」は、それ自体が一つの社会です。１つのテーブル(班)は、いわば「箱庭社会」と名づけてもいいかもしれません。その箱庭社会は、相互対等の視点で様々な意見を交換し、共有し、新しい知恵を創造する可能性も秘めています。大げさですが、小さな「ソーシャルキャピタル」が形成され、知恵の集積や継承が期待されるわけです。

私は、平成18年11月の発表において「クロスロード(分岐点)からクロスロード(知恵の集積＝人生の織物)へ」という考えを提唱しましたが、それは、神戸クロスロード研究会メンバーを始めとする多様な分野での展開の中で証明されるものと思っています。

３　クロスロードの課題と可能性

最後にクロスロードの課題を考えみたいと思います。

⑴　死に票問題

研修としてクロスロードを実施するうえで重要な課題の１つです。YES/NOカードを出すことを一種の投票と考えてみましょう。YES/NOの多数派に得点(青座布団)が与えられるクロスロードでは、少数派の意見が埋没しがちになります。金座布団では逆のことが起こります。班対抗の場合、座布団を得た意見を班の意見としているので、「死に票」が顕著になります。ファシリテーターやコメンテーターには、限られた時間の中で、両方の意見をくみ上げ、参加者に理解してもらう努力と工夫が求められます。

⑵　クロスロードは何の役に立つか

♪　研修としてのクロスロードを実施した場合、その盛り上がりによって成功・不成功を判断しがちになります。しかし、研修としての成功は、研修を受けた後に何を参加者が実行するかにかかっています。従って、クロスロードは、直接何かを実現しているものではありません。

これは「場」、主催者や参加者の課題というべきかもしれません。つまり、最終的に何かを目的として、その第1段階としてクロスロードが、参加者の知恵の共有を含むコミュニケーションを構築できれば、大成功というべきかもしれません。

♪　しかし、新しい知恵の創造を実現する場という可能性もあると思っています。単に「自分だったら」を考えるだけでなく、例えばあいさつ運動の設問なら、どうすればあいさつ運動に参加できるか、について知恵がまとまれば素晴らしいことです。

♪　とはいえ、ゲームだからこそ気楽に意見交換ができるというのもあります。ならば、意見・知恵の交換を仲介するのがクロスロードの役割だと考えることもできます。「そもそも」に戻ったとも言えますが、参加者が、行動を起こすキッカケと情報を提供することができれば成功なのではないでしょうか。もっとも、その様々な意見を記録することが、新たな課題かもしれませんが。

クロスロードには、知恵の共有・仲介・創造につながる「アイデアゴラ」(「ウィキノミクス」158頁)として、あるいは対立を活力に変えるコンフリクト・マネジメントまで期待できるかもしれません。

（神戸クロスロード研究会　柿本雅通さん）